
希望の地宝の章

『ラストクロニクル』ショートストーリー

作：滝 舜一

気だるげな少女の青い瞳は、行き交う人々の群れをぼんやりと映していた。こ
こ——ギサの街は、ガイラント有数の商業都市だ。武器屋に靴屋、両替商に生鮮
商、雑貨屋に道具屋……今日も通りは、多くの人々でにぎわっている。だが光あ
るところに影もあるのが世の常。そんな中、どうにも流行っているような見え
ない店もある。少女がカウンターに頬杖を突いているその店も、そういった「い
まいちパツとしない部類」に入るのは、残念ながら疑いなかった。

先日から一人も客を迎えていない、埃^{ほこり}つぽくなつたドア。その上には古ぼけた
銅板の看板がかかっている、そこにはスコップとダイヤモンドの意匠があらわ
れている。それはガイラント特有の「発掘屋」のシンボルだ。

「あー……ヒマねー……」

店のカウンターでは、ついに退屈しきつた様子の少女が、うんざりした声を上
げる。続いてあくびと一緒に伸びをした拍子に、心持ちショートカットにした髪
がさらりと揺れた。頬杖をついていたために一部が隠れていた少女の顔立ちが露
わになる。北方・ラティス地方のアルバネスの血でも引いているのか、ガイラン

トには珍しい色白の肌。白金色の髪も、この国では比較的まれなものと言えるだろう。肢体は少女らしくまだ発育の余地がありそうだが、バランスはよい。とてつもない美人というわけではないが、全体的に健康的な魅力に満ちた少女だった。ただ、普段ならきつとサファイアのように輝いて印象深いであろう深い青の瞳は、今は生気を失い、沼のようにどんより濁^{にご}っている。やがて彼女は、再びうんざりしたように足元に視線を落とす。

「ねえ、ミヤオマオ。あんたもちよつとは働きなさいよ……！ 例えば、お店の呼び込みとかさあ」

すると、すぐにカウンターの下から返事があつた。どこか気取つた、青年貴族のような若々しい声。

「いやあ、マルカも知つてのとおり、私は高貴な生まれだからな。肉体労働や泥臭い仕事には向いていないんだ」

少し人を食つたような返答と一緒に、カウンター越しにぴよんと小さな影が飛び上がる。一瞬間を置いて、彼はすたつとその上に着地した。

「つたく……じゃあせめて、ネズミを取るぐらいする気にならないの？」

「ネズミ？ うーん、あんなものは私の口に合わないからな。やはり食事は、鶏のもも肉を甘辛ダレと塩に胡椒こしょうで、じっくりと焼き上げたものに限るなあ」

流暢りゅうちやうな人語を操るその小さな姿は、後ろ足で立ち上がった一匹の猫にしか見えない。しかしよく見ると、上品そうなチョッキにズボン、赤マントに羽飾りの付いた帽子という出で立ちは、見る人が見ればすぐに分かる。よその地方では魔猫とも呼ばれることがある、ガイラントの人猫族だ。

「鶏のもも肉う？ それ、いったいいくらすると思ってるのよ……！ だいたいそんな食事なら、あたしのほうが食べたいくらいだわ！」

「ま、私も夢を語っただけだが」

「ふん。ねえ、ミャオマオは働かざるもの食うべからずって言葉、知ってる？」

今月もお店の売り上げ、赤字になっちゃってんだからさあ！」

マルカと呼ばれた少女は、唇を尖とがらせてわめき立てる。一方、ミャオマオという名らしい魔猫のほうは、澄ましたものだ。

「まあ空腹になりこそはするが、私は飢えて死ぬなんてことは、すぐにはないからな。いざとなったら、魔力を使って魂石化でのげばいい。しばらくはそれで耐えられるさ」

その口調は、まったく呑気のんきなものである。

「ダンゴ虫ですか……」

がつくりうなだれるマルカ。ミヤオマオは、本人の言によれば、数百年以上を生きているという話だ。もともとは普通の冒険者だったのだが、とある折に神秘的洞窟を訪れたことで、その不思議な力を手に入れたらしい。だいぶ前から奇妙な縁でここに居着いてしまっており、マルカにとっては、冒険の相棒でもあり気安い友達のような関係である。

「それにしてもよ！ こんなに通りはにぎやかなのに、お客さんの一人や二人、来ないなんておかしいと思うの！ もしかしてライバル業者に、悪い噂を流されてるんじゃない？」

心配顔で眉をしかめるマルカに、ミヤオマオはやれやれ、といった風情で言う。

「心配しなくてもマルカ、まだ駆け出しに過ぎない君のビジネスに、そんな高い評判がついてるとは思えないな。そもそも遺跡の発掘調査と宝物回収の請負なんて、世間の需要的には、下戸げこのノームくらいに希少な商売じゃないか……ま、果報は寝て待て、さ」

「でも、でもよ！ もしこのまま、誰もお客さんが来なくてこのお店が潰れちゃったら……!? 父さんから受け継いだ、大切な店なのよ？」

不吉な未来を勝手に想像して、顔色を青ざめさせていくマルカ。まあまあ、とミヤオマオが慰めなぐさの言葉の一つもかけようとしたその時。店のドアに取り付けられたカウベルが、静かに鳴った。

「あ、いらつしゃいませ〜！」

さつきまでの落ち込み具合はどこへやら、陽気さ全開、満面の作り笑顔でマルカは客を迎え入れた。

「こんにちは、お嬢さん。ところで、このお店のご主人はいらつしゃいますか……？」

扉を開けて入ってきたその男性客は、どこか知性を感じさせる、涼やかな声をしていた。

はい、と返事をしかけて、マルカの胸がドキリと高鳴った。

(……って、これは……)

その客は、驚くほどの美男子だったのだ。すらりとした長身になびく金髪。優しそうな緑色の瞳。上品な仕立ての藍色のローブを羽織はっており、見た目はどこかの魔術師か魔法研究者といったところだろうか。ガイラントではあまり見ない、知性を伴った優美さを感じさせる。

(うわー……すっごいイケメンだわ。それに何だかお金持ちそう……)

一瞬間まってしまったマルカだったが、さすがに心中の動揺を隠して、よどみなく対応する。

「こんにちは、マルカ発掘商会へようこそ！ それで、お客様のご要件は？」

「はて……もしかして、お嬢さんがこの店のご主人なのですか？」

優男は小首をかしげながら言う。まるで銀のハープを奏でたような、耳に心地

よい声だ。

「ええ、そうです！ こう見えても、腕には自信がありますから！」

今度は心底からのにこやかな笑顔で、ガッツポーズを作ってみせるマルカ。そばでミヤオマオが呆れたように見ているのを無視して、マルカは可能な限り華やかな笑顔を振りまいた。

※※※

「……つまり、新しく発見された遺跡の調査兼財宝発掘のご依頼、というわけですね？」

ふんふん、ともっともらしい威厳を作りながら、マルカが確認する。

「そうです。何ぶん私は学究肌なもので、力仕事は苦手です。それにまた、これでもさる王家の依頼を受け、各種の研究と調査を行う魔術ギルドに所属しております……。加えて、魔法書の執筆なども同時並行している身なものでね。い

ろいろと忙しいのですよ。けれど今後の魔法研究のために、どうしてもその遺跡にあるという『祖王の秘石』が必要なのです」

その魔術師は、巨大な生命の力を宿すというアンクアの大結晶を探しているらしい。それは「祖王の秘石」と呼ばれ、とある文献に記載があるのだという。そして最近、牙山のふもとで偶然に発見された、手付かずの古い墓所にそれが眠っていることが判明したというのだ。

牙山までの旅費や調査・発掘にかかる費用一式は、彼と彼が所属する魔術師ギルドが負担してくれるという。提示された契約書はしっかりギルドの印章が押されていたし、提案された財宝の取り分の数字は、相場に比べて破格のものだった。

「なるほど、なるほどー！」

にこにこしながら応対するマルカ。

（これは、ようやく私にもツキが向いてきたかな？）

ほくそ笑んでいると、カウンターの下から服の裾が引っ張られ、小さな声がささやく。

（おいおいマルカ、本当に大丈夫なのか？ 高報酬の仕事は、それなりの苦勞がつきものだ。それに、どうもそいつは気に食わないな……私の野生の勘がそう告げている。ガイラントに好男子は私一人で十分だ、とな）

そんなミヤオマオの言葉を、マルカは文字通り一蹴した。ギニヤ、と足元で妙な悲鳴が響くのと、マルカが小声で、こう言い返すのが同時だった。

（あなたは黙ってて！ ……だいたい今月、ちよつとキビシイのよ。最近仕事がない上に、寝てばかりいる穀潰しも養わなきゃいけないんだからね！）

「……はて？ 何か声があったようだが……」

「あーいやいや！ 表通りの声が聞こえてきただけじゃないですかねー！ ウチのお店、立地のせいにかたまたま表の音が反響して、妙な方向から聞こえてくるんで！」

依頼人の魔術師が不思議そうに首をかしげたので、マルカは慌てて愛想笑いをして誤魔化した。

※※※

それから一週間後。マルカとミャオマオは今、その巨大な遺跡の入口に立っていた。

「うわ、確かにでつかいわね……」

マルカがその石造りの門を振り仰いで、驚嘆の表情を浮かべた。目の前にそびえるのは、ほとんど山といってもいいぐらいの、巨大な祖王の墓所だ。石造りのそれは、もう何百年経過したのか分からないぐらいに苔むしており、密林の蔭や樹木の枝が絡みついて、まるで緑色の岩山のように見える。下部には岩に彫り込まれたような形の巨大な扉が露出しており、それが入口であるようだった。巧妙に土で覆い隠されていたのが、最近になって山崩れで露呈したのだ、とマルカたちは依頼人から聞かされている。見ると、確かに真新しい土くれが門の周囲に積み重ねられている。依頼人の魔術ギルドのメンバーたちが結界を張って、入口付近の簡単な調査だけを行った、ということなのだが……。

「じゃ、じゃあ行くわよ……」

マルカはごくり、と唾を飲み込みながら、恐る恐る、門のそばまで歩を進めた。
「ええつと……」

背中の革製背負袋から油紙に包まれた羊皮紙を取り出し、丁寧に開く。そこには、遺跡の門を開くための魔法の呪文のメモと、内部の見取り図らしい古地図の写しが記されていた。どちらも、あの依頼人から提供されたものだ。

「テア・ドゥーラ・ガイセナ……オル・ドゥール・ニライクム……」

おごそかに一連の古代言語を唱えると、ゆっくりと音を立て、扉が開いていく。同時に、遺跡の中の湿った空気が、どっと外の世界に溢れ出てきた……。ごくぐりと、とマルカは生唾を呑みこむ。

「そ、そうだ。ミヤオマオ、ちよつと中を覗いてみてくれない……?」

「えっ、なんで私が? この仕事を受けたのはマルカだろう?」

「いやあ、あたし、こう見えてもかわい女の子だからさあ。ほら、あなたなら万が一殺人的トラップに出くわしても、魂石化でやり過ごせるかなあつて

……！」

「……」

呆れ顔のミヤオマオを拝み倒すようにして、マルカは彼に先頭を進んでもらうことにした。

「これほどの遺跡を探検するのは、久しぶりだな」

真剣な面持ちのミヤオマオが松明を掲げて、一步一步、慎重に進んでいく。そのあとに続くのはマルカだ。彼女のほうは魔法で光を点したランプを掲げ、方位魔針——マグコンパスと古地図たずさを携えて、おっかなびつくりといった様子だ。二人の足音が反響し、絶えて数百年、誰も迎え入れることのなかった墓所の各所に、冒険者の来訪を告げていく……。

石組みの隙間から出入りしているらしい岩トカゲや赤錆蟻などを排除しつつ、やがて二人は、とある広間にたどり着いた。だが、そこに足を踏み入れた途端に、何か巨大なものが蠢うごめく気配が伝わってきた。

「……ミヤオマオ！」

「ああ、分かっているさ……」

小声でのマルカの警告に、振り返らずにミヤオマオが答える。彼の夜目の利く瞳は、乏しい光源の中で、そこに蠢くものうごめの正体をはつきりと捉とらえていた。

「ロックゴーレムの一種……？」

「そうだな。一度動き出したら決して眠らず、侵入者を排除するまで攻撃の手を休めない。動きはのろいが、面倒な奴だぞ」

岩で作られた巨大で無骨な彫像……それが、不法な侵入者を排除しようと動き始めたのだ。

「……ま、もちろんこの程度は想定済みだけだね」

最初こそぎよつとした様子だったが、マルカはすぐに落ち着きを取り戻す。そして、彼女は背中の背負袋から、とある小道具を取り出した。封を切つて袋の中から小さな人形を取り出し、呪文を唱えてからその場に設置する。マルカがすつと後ずさりした直後、みるみる巨大な影が膨れ上がった。

「ふむ、土人形だな」

「そ。ゴーレムには、ゴーレムってワケよ」

いつかイスラの魔法商人から買っておいた、護身用の穩形の土人形である。それは青い光を発しながらむくむくと大きくなり、すぐにゴーレムとがっしり組み合う。

「時間稼ぎにしかならないだろうけど、ここは任せるとしましょう。さ、脇をすりぬけるわよ！」

「ああ」

マルカたちの動きに気づいたのか、ゴツゴツしたゴーレムの巨大な腕が伸びてきたが、土人形がそれを掴み、動きを封じてしまう。

「よっしゃ、頑張れ土人形！ 呪力が切れるまで、しばらくは時間が稼げるわ！ さあ、急いで！」

勢いよく叫んだマルカがふと気づくと、ミヤオマオが背中を丸めて、その場にしゃがみこんでいる。

「ちよつとミヤオマオ、何してるの！ 今のうちだつてば！」

「おつとと……承知した！」

ミヤオマオもすぐに立ち上がり、マルカと一緒に走り出した。

※※※

「ま、ここまでくれば一段落でしょう」

しばらくして、息を切らしたマルカが、手の甲で額の汗をぬぐいながら言った。そつと後ろを振り返るが、広間はもう、長大な通路の端にかすんで見えない。相
当な距離が隔た^{へだ}つていると見て間違いないだろう。何しろあの広間を抜けてから、
一心不乱に二十分近くも走ってきたのだ。

「そ、そうだな……やれやれ！」

ミヤオマオも肩で息をしながら答える。ふと、マルカはその右手の指に、見慣
れない指輪がはまっていることに気づいた。

「ミヤオマオ、なにそれ？」

「ああ、これかい？ さつきゴーレムが守っていた広間に落ちていたのさ。ほら、ちよつと珍しいだろう？」

にんまりと笑つて、ミヤオマオが自慢げに指を掲げる。その指に光る指輪には、橙色の奇妙な宝石がはめ込まれている。彼ら人猫族がこういった小物に目がないことはマルカも知っていたが、さすがに彼女も呆れてしまった。

「ああ、さつきはそれを拾つたのね？ ……まったく、よくあんな状況でそんな余裕があつたもんね。呆れるわ」

と言いかけたその時、マルカの目が大きく見開かれた。

「あ、あれ……？ ミヤオマオ、天井を見て！」

「どうした……ギニャー！」

短い悲鳴とともに、ミヤオマオの毛が逆立った。薄暗い通路の天井……その闇の中に、無数の赤い目が、敵意に燃えて輝いている。マルカがさつと手元のランプを向けると、その光に驚いたように、無数の金切り声が闇の中に響き渡った。コウモリのような皮膜の翼に、鋭い牙。その小さな捕食者たちは、群れをなして

天井付近の横穴や、岩肌の段差にたむろしていた。

「ジャガースクワル……?」

身体は小さいが、成長して群れると凶暴になるガイラントの魔獣の一種である。「しかも、洞窟に住み着くタイプの亜種だ……こいつはヤバい、強行突破しよう!」

言うが早いか、ミヤオマオはまるで毛鞠が跳ねるようにして、一気に前方へと駆け出した。

「ちよ、ちよつと、そんな無茶な……!」

慌ててそう言いかけて、マルカもすぐに気づく。後退したところで、通路の果てにはあのゴーレムの広間がある。確かにここは、前へ向かって駆け抜けるしかないのだった。

(ええい、仕方ない!)

マルカは腹を決めた。

「ちよ、ちよつと待つてよ〜!」

焦った声を出しながら、マルカもミヤオマオに続く。遠ざかっていく二つの人影を追って、ジャガースクワルが上げる耳障りな金切り声が、無数に通路にこだました……。

しばらく迷宮のような通路を走ったあと、息が切れたマルカはようやく立ち止まった。いつの間にか、床は傾斜し、下り坂になっている。さつきから連続で走っているから、もうさすがに体力が限界だ。

「はあ、はあ……ここまでくれば、アイツらもそうそう追いつけないでしょう……」

息を切らせながらマルカが言う。

「た、確かに……だいぶ走ったからな……」

同じようにせいせい言いながら、ミヤオマオが答える。

「あんた、もとは冒険家のくせに、もうバテたの？ 飼い猫暮らして身体がなまつたんじゃない？」

ちよつと意地悪く言ってみるマルカ。

「は、ははっ……そ、そんなことはないぞ！ さっきはちよつと急だったから、無駄に力を使つてしまつただけだ……！」

ミヤオマオは、まだまだ元氣だとばかりに、胸を張つてみせた。

「だ、だいたい古王の墓所というからどんな危険な場所かと思つたが……存外、たいしたことはない……ん？」

ミヤオマオが気取つたポーズで壁に寄りかかった時、ふと、妙な物音がした。どこかでガコン、と何かがかくぼみにはまるような音。同時にマルカの背筋を、ぞくりと悪寒がなでる。悪い予感がした……。

「ミヤオマオ、気をつけて……ああっ!？」

注意を促した直後、マルカの目が大きく見開かれた。ミヤオマオがその視線の先を追うと……通路の側壁全体に、ぼつかりと四角い大穴が空いている。そしてその中から転がりでたのだろう、目を見張るほどの巨大さの丸岩が、通路の少し向こうに出現していた。しかもそれは、傾斜した通路をどんとどんと勢いを増しながら、転がり落ちてくる！

「きゃあああああああ！」

「ウニャアアツ!!」

二人はそろって大声を上げると、必死の形相で再び通路を走り始めた。

「えっと、アレよアレ、どこしまったかな……!!」

マルカは全力で足を動かしながら、焦った表情で、ごそごそと背中から外した背負袋の中を探る。

「マルカ、何か策があるのか？ なら、さつさと手を打ってくれ！」

「う、うるさいわね、今ちよつと見つからないのよ……」

「この緊急時に!? まったく、鞆や袋にモノを仕舞いこむときは、常に定位置を決めておきたまえ！ だいたい、君は女性として少々がさつというか、ものを片付けるのが苦手というにもほどが……」

「分かつてるわよ、分かつてる！ ああ、コレでもない、アレでもない……!!」
必死で通路を駆けながら、マルカは革袋からぼいぼいと余計なものを掴み出しては、そこらに放り捨てていく。

「マルカ、前だ！」

唐突に、ミヤオマオの緊迫した声。はつとしてマルカが顔を上げると、なんと、通路の先は行き止まりになっていた。どうやらあの丸岩は、侵入者を逃さず抹殺するための、通路の構造とセットになった罠だったらしい。

（マズい、このままじゃ逃げ場が……!!）

胸の中にひとときわ激しい焦燥感しょうそうかんが湧き上がるのと、マルカの指が、袋の中でようやく探していたものを引っ掴むのが同時だった。

「あ、あつた〜〜!!」

涙目になりながら、ようやく見つけ出したそれは、導火線とつながった着火装置の付いた丸い物体だ。その長い紐を勢いよく引き抜くと、マルカは走りながらその物体を後ろへ向けて投げ込んだ。もう行き止まりの壁までは、少しの猶予しかない。

「ミヤオマオ、もうちょっとだけ頑張つて走つて……!!」

そう声をかけた直後……通路に轟音が響き渡り、凄まじい閃光が上がった。爆

発で生まれた風圧に押し出されるように、マルカとミヤオマオは、そのまま床に突っ伏してしまふ。そんな二人の周囲を、大量の破片と薄煙が覆い隠した。

……しばらくして、思わず頭を抱え込み、目を閉じてしまっていたマルカが、恐る恐る後ろを振り返る。幸いなことに、二人を押しつぶそうと迫っていた大岩は、見事に爆発に巻き込まれて砕け散っていた。

「ふう、助かった……！ あ、危なかったわね……！」

同様に頭を伏せていたミヤオマオが、冷や汗をかきながら起き上がる。

「まさに危機一髪だ。それにしてもあれは……もしかして、雷火薬の大玉か……？」

「へへ、こんなこともあるかと、ね」

マルカが得意そうな笑みを浮かべる。

「ぶっそうだな。何かの弾みに爆発したらどうするんだ？」

「えー、ちゃんと特製の火消し布にくるんであったって！」

「とはいえ、こんな石組みの建物の中で使うなんて、ずいぶん乱暴だと思うが

……?」

呆れたようなミヤオマオ。

「ふん、この遺跡、そこらの建物なんかよりよっぽど頑丈だわ。さあ、探索を続けるわよ！」

と勢いよく言った直後。マルカは怪訝けげんな表情を浮かべ、次にはごそごそと身を探る不審な動きをはじめ……しばらくしてから、こほん、と一つ咳払いをした。

「これは……ちよつとばかりまいったわね……」

「んん？」

訝いかぶしげな顔のミヤオマオ。

「うゝん、ちよつぱり、まずいことになっちゃったなあ……」

「……」

何かを予期してか、ミヤオマオの表情がさつと曇る。

「えつとミヤオマオ、心して聞いてね……マグコンパスなんだけど……さつき大岩から逃げて走ってる時に、うっかり落としちゃった！」

「……こんな魔宮みたいな遺跡の中で？ 方向が分からなくなった、と？」

「ゴ、ゴメーン！」

がばりと両手を合わせ、冷や汗を流して謝るマルカ。ミヤオマオは崩れ落ちるように膝をついて、一言だけ口にした。

「やれやれ……だから君は少々がさつすぎると言っただ……！」

※※※

祖王の墓所の通路は、侵入者を阻むためか、まるで迷路のように入り組んでいる。さんざん迷った末、腹時計で夜の到来を察した二人は、偶然見つけた小さい広間で、簡易キャンプを張ることにした。

マルカが呪文を唱えると、そのミニチュアのような小屋はたちまち巨大化して扉を開き、主たちを迎え入れる準備を整えた。内部にはちよつとした一軒家くらいの空間があり、リビングのほかに就寝スペース、狭くはあるが風呂や厨房など

が完備されている。数十年前、空間魔術に長けたとある冒険家が生み出したそれ——魔法のテントは、高い利便性から、たちまちガイラント中に広がっていったものだ。

扉をくぐって、周囲に魔物よけの結界を発動させた瞬間、ミャオマオがにやーにやーとうるさく言う。

「マルカ、私はひどく空腹だ！ 早く厨房で火を起こして、何か作ってくれないか」

「はいはい、ちょっと待ってて」

「今日はたくさん動いたし、魔力も消費したからな……早く早く、お腹がすいてたまらん！」

尻尾をゆらゆら振りながら、上から目線で要求してくる。まるで、聞き分けのない少年のようだ。

「もう、分かったわよ……」

マルカはくすりと笑いながら素早く火を起こすと、干し肉のスープとナイフで

削ったパン、それに瓶詰め野菜とチーズという簡単な食事を整えた。

しばらく後。手早く備え付けの簡易風呂で湯浴みを済ませたマルカは、薄絹の寝巻きに着替えてリビングで一息ついていた。

「やれやれ、ようやく落ち着いたわね……！」

同じくソファに腰掛けているミヤオマオが、毛皮を手入れしながら同意する。「そうだな。しかしいつも思うが、君はこういう簡単な食事だけは、手慣れたものだな」

そう言いつつ、彼はざらついた舌で、ヒゲの先についたスープの雫を舐めとって満足げに息をついた。

「まあ、小さい頃から慣れっこだしね」

「いや、調味料の組み合わせや味つけだつてなかなかのものだ。でも、こういうパパッと作る料理が得意なのに、きちっとした料理がてんでダメなのは不思議だな」

「最後の方だけ、余計なお世話よ。ふう……お腹いっぱい。ちょっと眠くなって

きたな」

マルカはそう呟き、満たされたお腹に手を当てながら、天井を見上げた。眠気を催したマルカの様子を魔法のテントが察したのか、ふと、室内の照明が一段暗くなる。それは主の眠りを誘うように、淡く優しい光へと変わった。薄暗い照明の中、天井に無数に取り付けられた小さな魔光石が、星空のように光り始めた。

「こんな状況でなければ、ロマンチックなんだがな」

ミヤオマオが呟く。

「そうね……なんだか、小さい頃に父さんと旅をしていた時のこと、思い出しちやった」

「ふむ？」

「いつか、古い遺跡が地下に眠る大平原で、こんな風に星空を眺めたことがあったわ……二人で」

マルカはふと、遠い目をする。その指は、いつの間にか腰にぶらさげた大きな宝石のブローチに触れている……それは、いつかの誕生日に父がくれたものだ。

あの飛び上がるような嬉しさを、マルカはいまだに昨日のこのように覚えて
いる。

……父は、有名なトレジャーハンターだった。何でも夢ばかり追っていて妻に
愛想をつかされたらしく、周囲には彼のことをとやかく言う人間もいた。それで
も、マルカにとつてはずっとずっと、誇らしい父親だった。ちよつと世渡りは不
器用だが、彼はいつでも夢を追っていた。とことん陽気で明るく、どんな逆境で
あつてもめげなかつた父……だが、彼はガイラントのどこかにあるという「霊界
つなぎの大霊廟」を調査すると言い残して、それきり行方不明になつてしまつた
のだ。

「あの綺麗な星空を見上げて、雄大な歴史や星々にまつわる神話に耳を傾けたら
……つまらない争いにかまける心なんて、みんななくなつてしまふのにな。あた
しはいつか、博物館を作つて世界中の人たちに、教えてあげたいんだ。この世界
に息づく、悠久の歴史とその偉大さを……」

今はほんの駆け出しだが、マルカはいつか、父にも負けない立派なトレジャー

ハンターになりたいと思っっている。そして数々の手柄を立てたあと、収集した品を集めた博物館を開いて館長に収まり、悠々自適の生活を送る……それが、今の彼女の夢なのだった。

もう何度目かの、そんな話を聞いたミヤオマオの反応は、今日は少し違っていた。彼は珍しくそつと微笑んで、こう言ったのだ。

「夢か……なかなか、いいものだな」

「あら、珍しい。何か変なものでも食べた？」

いつもなら、未熟な彼女をからかうような言葉が出てくるのが常だったのだが。「ふふ。けっこう久しぶりに遺跡探検などしているから、気分が若返ったのかもな」

「へえ。……そういえば、ミヤオマオには、夢はないの？」

「私の夢……？」

ふーむ、と呟いてから、ミヤオマオは静かに笑った。

「さあ。あったかもしれないが、忘れてしまったな」

「あ、それはちよつとズルくない？」

マルカは少し唇を尖らせる。

「ふふ、長く生きていると、いろんなことを忘れてしまうのさ」

なんだか時々、ミヤオマオって年寄りなのか若いのか、よく分からないな、とマルカは思う。この魔猫がどれくらいの間を生きているのか……本人は軽口を叩くように「もう数百年は生きている」などとよく言っているものの、正確なところはマルカすら知らないのだ。

「それにしても、昔の王様たちは、なんでこんな墓所を作ったのかしらね……」

「まあ、権力を誇示するためだろうな」

「……でも、死んでしまったら仕方ないじゃない？」

「霊魂は不滅だからな。そういう教えは、古くからガイラントに伝わっているものだ」

「ふうん……確かに、ドルイドのおじいちゃんたちはそう言ってるわね」

「事実さ。彼らは別の世界の英雄たちの魂を呼び出しさえするのだから」

「英雄、ねえ」

「そうさ。まあ、彼らにもその理屈自体は分かっているようだがね、おおむね、祖霊の力や大地の神ガイラによる奇跡の一環だと考えられているようだが」

「どつちにせよ、私たちには縁遠いわね。歴史に名を残す偉業を為しとげるなんてさ」

「……かもしれないな。だが、人生っていうのはどう転がっていくか分からないものさ。マルカぐらいの年だと、ピンと来ないかもしれないが……」

「え〜!?、あたしだって、ある程度のこととは分かるわよ。もう、子供じゃないんだし」

「ふふ、どうかな？」

ミヤオマオは少し笑顔を見せたあと、ふと真顔に戻って言った。

「マルカ……人はなんのために生きているのだと思う？」

「えっ!? うーん、考えたこともなかったな……」

「私はね、生というのはいけません、かりそめの時間に過ぎないと思っている。例

えそれが数十年、数百年であろうと、ごくわずかな時間であろうと同じことだ。そしてね、究極のところ、人は何かを残すために生きていると思うのさ」

「……ふうん？」

「花は種を残し、動物は子孫を残す。それだけじゃない。詩人は詩を、英雄は伝説を、商人は財を……。この世はかりそめの場所だけれども、誰もがそこを通り過ぎ、何かを残していく……。それが積み上がり、無数に重なって、悠久の歴史を作っていくのさ」

「なによ、ちよつと立派なこと言っちゃって。柄にもない」

そう言つてマルカは笑つたが、瞳にはほんの少し、彼の話に興味を持った証の、好奇心の欠片が浮かんでいる。それを見て、ミャオマオはふと古い友の眼差しを思い出した。かつていくつもの遺跡と一緒に旅し、数々の冒険の中で危険をとまにくぐり抜けた、懐かしい友人のことを……。

そもそも、彼がマルカのもとにやってきたのは、彼が別れ際に残した言葉に従つてのことだった。まだ小さかったマルカは、父の友人だというミャオマオの突

然の訪問に、最初はひどく驚いていたものだ。まるでそこの猫のように、好奇心のおもむくままに、ヒゲを引つ張られたり毛をむしられたりしたこともある。だがやがて、マルカも彼も、お互いがお互いにすっかりなじみ、打ち解けるようになった。

そのままいくらかの年月が経って、マルカが十五歳の誕生日を迎え、発掘屋稼業を立ち上げる頃には、すでに一緒に冒険をする相棒のようになっていた……。

（やれやれ、こんな時に昔のことを思い出すなんて。私もいよいよ、本気で年を取ったということかな……？）

そんな自嘲めいた感慨にふけりながら、彼は星明かりにも似た光の中で、ぼつりと言った。

「さつき、私は夢なんて忘れてしまったと言ったけれど、ふと思いついたこともある……。昔、私にも夢があった。それはこの世界にある、たった一つの永遠……ザインの神殿を探すことだった。世界のどこかにあるという、世界の理から隔離された場所……そこにたどり着いて、ひと目クロノグリフを見てみたい、と

いうのが、昔の私の夢だったんだ」

「へえ」

マルカは目を丸くする。ザインの神殿のことは、さすがに彼女も知っている……そこには世界の歴史を紡ぎ^{つむ}続ける創世の書、クロノグリフが安置されているという話だ。

「そもそも、クロノグリフがどんなものでどんな形をしているのか……ある者は巨大な石板だと言い、またある者は不思議な紙でできた膨大な詩篇だと言い、いや、クロノグリフ自体が世界の写し身であり、見るものによってその姿は異なるのだと言う者さえいる。だが、確実なのは神々やごく限られた存在以外に、それを見た者はいないということだ。だからこそ……私はそれを目の当たりしてみたいのさ」

不思議な色の液体をたたえたように見えるミヤオマオの丸い瞳に、淡い照明の明かりが照り輝いている。マルカはそれを、まるで綺麗な宝石みたいだと思った。「ふうん、なるほどね……」

「マルカは、魅力を感じないか？」

「うーん、そうね。素敵だとは思いうけれど……あたしは別にいいかな。それって何だか……寂しそудなもの」

「寂しそуд？」

目をぱちくりさせるミヤオマオ。

「だって、ザインの神殿にたどり着くってことは、それだけ神様に近づくとよね。そこは、あらゆる時間や世界の理から隔絶された場所なんですよ」

「うん、それはそудだが」

「でも、存在が神様と同じになるってことはさ……つまりとこ、永遠と一つになることですよ？ 永遠にただ、世界の成り立ちや歴史の流れを見守る存在になるってこと……そんなにスケールの大きな存在になっちゃったらもう、生命の小さな喜びや悲しみは、きつと感じ取れないようになってっちゃうんじゃないかな」

「……だが、世界や運命自体を支配できるかもしれないぞ？」

「うーん……それでもあたしはあまり、そんな生活に魅力を感じないな。いつだ

って、ワクワクすることや楽しいことは、この身体や魂で、直接感じていたいの」

「……」

「それに……クロノグリフとやらには、ありとあらゆることが書いてあるんでしよう？ 例えば、まだ誰も開けていない宝箱をミャオマオが見つけたとして、中身が先に分かっていたら、興ざめじゃない？ あと、仮にあなたがクロノグリフを覗き見て、未来を知ってしまったとして……その後、ミャオマオはどうなっちゃうのかしら？」

「……どうなる、というと？」

「この先の運命を知ったとして、それを変えるってことが、ホントにできるのかな？ 昔の物語にあつたみたいに、どれだけ運命の結末に抗あがおうとしても、結局それは変えられず、あるべき結末に落ち着いちゃうんじゃないかしら？ だって、運命っていうからには、それくらい大きなものじゃなくっちゃおかしいじゃない？ で、何をやっても運命は変えられないのだとしたらその行為に意味はない

し、変えられるのだとしたら、未来の記述を知ること自体が無意味じゃん？ それにね、これは直感なんだけど……」

マルカは少し言葉を切ってから、静かに言う。

「世界のすべてを知ってしまった時点で、おそらくその存在は、世界の枠の外にはみ出してしまふんじゃないかな……それはきつと、ちよつぱり寂しいことだと
思ふんだ」

「……ふうむ」

ミヤオマオは小さくうなづいた。

「なるほどね、そういう見方もあるのか。マルカ、やっぱり君は面白いな」

「なによ、皮肉のつもりなの？」

「いいや、私は素直に賞賛している……君の直感力は、たいしたものだね。素
晴らしいな、君はやはり、無限の可能性を秘めた存在だと言えるかもしれない」

「そ、そうかな……？」

珍しく褒められて、マルカはちよつぱり頬を火照らせてしまう。

「まあ、今はちよつとばかり胸のふくらみや手足の長さが足りないが。まだまだ、成長段階だからなあ」

「……」

「ま、私ほどではないけれど、いずれきつと言い寄る異性ぐらいは出てくるさ。それまで、胸はきつちり大きく育つように、気をつけたほうがいい。適度な運動を毎日して、山岩牛の乳もたっぷり摂取してね。そしていい雄を見つければ、きつと元気な子孫を残せ……」

ミヤオマオの頭が乾いた音を立てると、ニヤグツ、と押しつぶされたリヤブ一族のようなうめき声が聞こえたのが同時だった。

「……あなたつて、ふた言目にはあたしより長生きしてるとか威張るわりに、たまにすごくデリカシーつてもものがないわよね！」

「な、何をするんだ！ 失敬な！」

「ふん、このドラネコが！ まったく、さつきはちよつと感心してソんしちゃったわ！」

「な、なんだと!? 言うに事欠いてドラネコとは! 大冒険者で高貴な血筋の私にとつて、重大な侮辱だぞ、それは!」

やがていつもの一人と一匹のどたばた騒ぎが一段落すると、テントの中にはそつと、二つの寝息だけが満ち始めた。そうして、遙か古代から王の眠りを見届け てきた神聖なる静寂だけが見守る中、あたりには静かに、やわらかな闇の帳が降りた……。

※※※

翌日。しゃっきりした頭で、マルカは目を覚ました。まるで棚のように外壁に据え付けられた簡易二段ベッドとはいえ、魔法のテントの中での深い睡眠は、体力を十分に回復させてくれている。

「ほら、起きて起きて! ミャオマオ!」

「う〜ん……あと五分だけ……」

簡易ベッドの下段でポンポンのついたナイトキャップを被り、まだむにやむにや言っているミャオマオを強引に叩き起こすと、マルカは狭い就寝スペースからリビングに足を向け……目を大きく見開いた。

「あああ~~~~ツ！」

素つ頓狂な声を聞きつけ、ミャオマオが寝ほけ眼をこすりながら、リビングにやってくる。

「み、見てよ！コレ！」

マルカが指さした室内の様子を見て、ミャオマオも驚いたように目を丸くする。……リビング中が、めちゃくちゃに荒らされている。棚にしまっておいたはずの各種瓶詰めが蓋が外され、中身が散乱している。また、紙に包んで保管していたチーズの塊も、その紙をはがされ、中身が食い荒らされていた。

「ネ、ネズミの仕業かしら……？まったくと、ひどい有り様だわ！」

「魔物よけの結界は、無害な動物には効果がないからなあ……しかし、どうやって中に入ってきたんだろう？」

ふーむ、とミヤオマオはヒゲをしごきながら、仔細しさいに状況を観察しつつつひや呷く。マルカははつとしたように言った。

「最初、テントの扉を開けた時に、するつと脇から潜り込まれたんじゃないかしら？」

「その可能性もあるな……しかし、ちよつと妙じゃないか？」

「え？」

ミヤオマオがつまみ上げたのは、食料品とは別に床に落ちていた、小さな箱だった。

「これは、私の宝石保管用の小箱だが……なんとこれも、荒らされている！ 驚くべきことにね」

いまいましげな声にマルカを見ると、ミヤオマオが遺跡で拾った小物……古い指輪やちよつとした宝石などを溜め込んでいる小箱が、確かに床に転がっている。ふたは開かれたままで、中身はばらばらに散乱していた。

「食物ならともかく、宝石に興味を示すネズミがいるとも思えないが……それに、

「どうやって棚や瓶、小箱のふたを開けたんだろう？　そこそこの器用さと知能が必要なはずだが……あつ！　くそ、この宝石、ちよつと端っこが欠けてるぞ!？」

「ガイラントでは珍しい、貴重な鉱石だったのに!！」

唐突にミヤオマオが、頭をかきむしって悲鳴を上げた。

「えっ……あら、まるで齧かじられたみたいな欠け方ね……?？」

「ふうむ……さては!！」

ミヤオマオが呟いた次の瞬間。マルカが驚いたことに、彼はさつと目にも止まらぬ勢いで動き、リビングの調度品のソファの下に顔を突っ込んだ。

「な、何をやってるの!？」

「……どうやら、早くも犯人を捕まえたようだ。なるほど、やはりね……!！」

ミヤオマオの右手でもこした尾をつまみ上げられ、じたばたしている小動物……それは薄い蜂蜜色の毛皮をまとい、奇妙なことに、額には小さな蜜柑色の宝石が、台座にはまったように鎮座している。

「それは……?？」

「宝石かじりさ。穴ぐらや鉱山跡、古い遺跡に住んでいる小幻獣の一種だな。チーズとか普通の食べ物も食うが、何より小さな宝石をかじるのが好きな困った奴だ」

「なるほど……」

マルカが小首をかしげながらミヤオマオの手元を覗き込むと、ふとその小動物のつぶらな瞳と視線が合った。

(あら、けっこう可愛らしい顔してるのね……)

マルカが心の中でそう思った途端、まるでタイミングを図っていたように、それはキーキーと鳴きながら、怯えたような声を出した。

「お嬢さん、可愛いお嬢さん！ お願いです……後生ですから、この性悪な猫から僕を助けてください！ お願いですー！」

「ええっ！ こ、言葉を!？」

マルカはびつくりして、口に手を当てた。ミヤオマオも少なからず驚いたようだった。

「ほう……言葉話すとは面妖めんような。そんな宝石かじりがいるなんて、聞いたこともないが……」

呆れたように呟き、宝石かじりをしげしげと観察する彼。そんな彼の視線に怯えたように、小動物はなおも叫んだ。

「わ、悪気があったわけじゃないんです！ ちょっと美味しそうなチーズの匂いと、宝石の香りがしたもので……つい……！」

「あなた、いったい……ただの宝石かじりじゃないようだけれど？」
驚きを含んだマルカの声に答え、小動物は震える声で言った。

「ぼ、僕は、この遺跡に住んでいる宝石かじりの一族で、大尻尾のガメルの孫のチメルです……勝手にあなたたちのテントに入って、チーズや宝石をかじったのは謝ります、このとおりです！ だからどうかどうか、命だけは助けてください！」

「そ、それはもちろん考えるけど……それよりあなた、どうして言葉をしゃべれるの？」

その問いかけが意外だったらしく、小動物——宝石かじりは目をぱちくりとさせながら答えた。

「え？ あ、ああ、この遺跡の中央にある玄室の隣の宝物庫に、ぴかぴか光る、大きな宝珠が祭られているんですよ。その近くを代々ねぐらにしているうち、僕らの一族に不思議な魔力が身についたとかで……」

「巨大な宝珠……!?!」

「不思議な力!?!」

マルカとミヤオマオが同時に声を上げ、二人の視線が合う。次の瞬間、マルカが勢いこんでいった。

「じゃあ、じゃあさ！ あなたたち、もしかしてこの遺跡の内部構造に詳しくなかったりするの!?!」

「そ、そりゃあ代々住んでますし、この遺跡は、ぼ、僕たちの庭みたいなもんですから……」

不意に大きくなったマルカの声に怯えた宝石かじりの言葉は、逆に消え入りそ

うに小さくなる。

「おおー！　じゃあさ、あたしたち、ぜひ行きたい場所があるんだけど……その宝珠がある部屋まで、道案内を頼めないかな？　もちろん、あなたを取って食ったりしないからさ！　……というか、特別にチーズひとつかたまりのおまけも付けてあげる！」

「は、はあ……」

マルカの勢いに押されたように、宝石かじりは小さな頭を動かし、こくりとうなづいた。

ジャガースクワルの巣穴や、遺跡に潜り込んだアースドラゴンのねぐらをやり過ぎ、落とし穴に矢の罠、動く石像に落とし格子といったトラップと難関をくぐり抜け……マルカたちはたっぷり一日かけて、ようやくそこに辿りついた。道案内をしてくれた宝石かじりに礼を言い、報酬を渡してから別れると、マルカとミヤオマオは、その巨大な扉の前に立った。やがて二人は、どちらからともなく

顔を見合わせてうなづき合う。

「よ、よし、行くわよ……！」

「ああ……！」

取っ手の錆びた鉄の輪を握り、息を合わせて力を込める。重々しい音とともに、巨大な扉がゆっくりと開いていく。そして、マルカとミヤオマオがそこに踏み込んだ瞬間……すうつと水面に波が立つように、周囲に魔法の燐光が広がっていった。それに呼応したように、中央の豪華な台座に据えられた宝珠が、一気に発光する。さつきまで薄暗かった岩室はたちまち、まるで壮麗な聖堂でもあるかのようになり、やわらかな光に満ち溢れていった。

「うわー……！」

「こ、これは……！」

驚きと歓喜を押し殺して、マルカとミヤオマオは目を見張った。宝剣や宝冠、首飾りや金貨といった数々の宝の存在感をもとめせず、宝物庫の中央に、どっかりと鎮座している巨大な宝珠。丈夫そうな石の台座に置かれたそれは、ほとん

ど子供の身長ほどの大きさを持つていた。

「こんなに大きなアンクアの結晶、見たことないわ……！」

「それだけじゃない、巨大な魔力も込められているようだぞ……すごい魔力の気を感じる……！」

それは宝珠というより、ほとんど小さな太陽のようでもあった。マルカとミヤオマオが滑らかな表面に恐る恐る触れた途端、みずみず瑞々しい黄金色の光が宝珠から溢れ、二人の全身を駆け巡った。

「うわッ!？」

やがて、急速に二人の身体を覆っていた黄金色の光が、収まっていく。

「あ、あれ……？」

マルカがふと気づくと、今日一日遺跡の中を歩き回った疲れが、嘘のように消え去ってしまった。ミヤオマオは、と見ると、彼も同様のようだ。

「これはすごいな……！ 難病の一つや二つ、あつという間に全快してしまいうだ！」

感激したような声を上げるミャオマオ。

「う、うん……ちよつとした体力増強とか生命力の回復だとか、そんなレベルを遥かに超越してる……。な、なんだかちよつぴり、怖くなってきたわ……」

「はは、奇遇だな、私もだよ……」

……二人がこわばった笑いを浮かべて言葉を交わした直後。唐突に、背後から声がした。

「ご苦労様でした、お二人とも……!」

「えっ?」

驚いて振り向いたマルカたちの前で、宝物庫の隅にできていた光の当たらない影から、闇がさつと伸び始めた。やがて、それはするすると解けだし……まるで細い紐が寄り集まるように形を作り、見る見るうちに人の姿となる。

「あ、あなたは……!?!」

いつの間にかそこに立っていたのは、ローブをまとった魔術師らしき風体の男だ。しかも、長身になびく金髪に理性的なブルーの瞳、さらに藍色のローブをま

とつたその姿——見間違えるはずもない。それは、マルカの店にやってきてこの依頼を頼んだ、あの魔法学者その人の姿だったのだ。

「ふふ……やはりあなたたちに頼んで正解でした。予定通り、見事に秘宝にたどり着いてくれましたね」

「で、でもあなた、いつたい、どうしてここに!? 別の研究と用事があつたはずじゃ……?」

マルカが目を見開いて尋ねると、男は静かに唇の端を曲げ、どこか歪んだ笑みを浮かべながら答えた。

「いや、それは方便でしてね。本当は、私の魔力では破壊もできず、闇にまぎれて通過することもできない強力な罫や障害が、遺跡の中にあつたのですよ。さらにこの扉には、そもそも秘術による封印が施ほどこしてあつて、大地の加護を受けたガイラントの民でないと開くことができない。……そして、あなたたちがそれを我知らず破ってくれたおかげで、私がここまでこれたというわけです」

「なんですって……!?!」

「さて、約束の報酬……今、この場で支払ってあげましょう！」

皮肉げな声とともに、男が右手を掲げた。いつの間にかその人相はひどく歪んだものになっており、まるで別人になってしまったかのような印象さえ漂っている。やがて、すぐに男の細い指先に、黒い闇が吸い込まれるように集まり始めた。

「こ、これは……!?!」

唐突に場に満ちた邪悪な気配に、マルカが身構える。次の瞬間、何かがマルカの背中に体当たりをしてきた。

「きゃっ!?!」

少しよろけたマルカは思わず二、三歩たたらを踏んで、ようやく身体を支えた。その直後、さつきまでマルカが立っていたその場所に、男の指先からほとぼしかった黒い光の束が吸い込まれていく。それは専門的な魔術は素人のマルカにもはっきりと分かる、黒魔術による邪悪な光だった。そして、マルカの代わりにそこにいたのは……

「ミ、ミヤオマオツ!!」

「ぐッ……!!」

マルカをかばって闇の呪術の一撃を受けた、ミヤオマオが低く呻いた。

「だ、大丈夫!？」

マルカがはつとして叫んだ次の瞬間……黒魔術を放った男の顔がちらりと視界によぎる。男はしてやったりという表情で、酷薄そうな笑いを唇に浮かべていた。

「どうです、私のカオスバニッシュの威力は!」

マルカの目の前で、黒い光が無数にミヤオマオの周囲を取り囲んで弾けた。思わず、マルカが悲鳴をあげる。

「……さあ邪悪なる光に捕えられし魂よ、消し飛べ!」

男の声に続いて、ミヤオマオの身体から、まるで闇そのものが刃となって突き出たような、どす黒い閃光がほとばしる。それが消えると……岩肌の上に、角ばった多角形の橙色の物体がひとつ、転がっていた。

「……!？」

今度は、男が怪訝けげんな表情を浮かべる番だった。だがすぐにそれは、新たな黄金色の光を放ち始め、それが消え去った頃には、元通り元気なミヤオマオの姿がそこにあった。

「な……何っ!？」

狼狽ろうばいする男に、ミヤオマオが不敵な表情で言い放つ。

「ふん、残念だったな。あいにく私にはちよつとした特技があつてね……ちつとやそつとじゃ倒れないのさ。もつとも痛みは感じるし、魔力も激しく消耗するから、そう何度も使えないが」

腕組みをしながら岩肌の上に仁王立ちし、にやりと笑うミヤオマオ。

「も、もう……心配させて!」

マルカがほつと胸をなでおろした様子で、そのそばに駆け寄った。カオスバニツシユを放った男は、さすがに驚いた様子だったものの、すぐに落ち着きを取り戻し、状況を察したようだった。

「魂石化の能力……それに、引きずり出しの魔法を秘めた古い指輪を、組み合わせ

せたのですか……なるほど、私のカオスバニツシュを防ぐには、有効な手段だ」
眉根を寄せ、いまいましそうに呟く。

「ご名答と言っておこう。拾い物だが、なかなか役に立ったよ」

右手の指をからかうように振りながら、ミャオマオが答える。その指先には、
ゴーレムの広間で拾った、あの古い指輪が光っていた。

「さて……今度はこっちの番だ。このいきなりの卑劣な仕打ち、どういうつもり
だったのか、たつぷりと聞かせてもらおうぞ……！」

ミャオマオはそう言うが早いか、腰に下げていた小剣をスラリと抜き放ち、戦
いの構えを取る。マルカも怒りに燃えた瞳で、男に向き直るときつ、と彼を睨み
つけた。

「あなた……絶対に許さないわよ！ それにあの契約書、最初から守る気がなか
ったのね！ 魔術ギルドに訴えてやるから！」

そんな二人の様子をものともせず、男は不敵に笑う。

「ふっ……あなたに許してもらおう義理なんてありませんよ。あの契約書は、文面

もギルドの印章も全部私が魔術で作った偽物だ……久しぶりの仕事に浮かれたあなたは、ろくに確認もしなかったようですがね」

「な、何ですって！」

マルカが歯ぎしりすると、男は挑発するかのようには嘲笑した。

「それに、そもそもあなたたちが、この墓所から生きて出られることはありませんよ。なぜなら、私があなたたちを二人まとめて、ここで消し去ってあげますから……ふふ、墓所だけに、死ぬにはおあつらえ向きの場所でしょう！」

「ふん、そう簡単に行くかな!？」

「ガイラントのトレジャーディガーを、なめてもらっちゃ困るわね！」

ミヤオマオが剣を構え直し、マルカは背負袋から愛用のスコップを取り出すと、特殊機構を作動させて、その柄を大きく伸長させた。それはトレジャーディガーたちのおなじみの品で、携帯に便利な上に、いざとなれば戦闘用にも使えるという、ギサの細工師による逸品だ。

「悪いが一对二だ……容赦はしないよ！」

「覚悟なさい！ 謝るなら今のうちよ？」

だがよほど自信があるのか、男はまったく動じる気配がない。それどころか彼はもう、最初は秘めていたらしい闇の魔力の波動を、隠そうともしていない。今やマルカとミャオマオに向けられているのは、明確な殺意だった。彼が降伏する気はもちろん、一切の謝罪や言い訳の言葉を口にするつもりがないのは明白だ。

「……どうやらもう、依頼料と分け前はあきらめたほうがよさそうね！」

「そうだな。さつきは不意をつかれたが、もう同じ手は通用しないぞ！」

「……ふん。まったく口が減らない小娘と野良猫だ」

男はその表情を憎々しげにゆがめ、冷たい声で毒づいた。

「上等です。もう正体を繕う意味もないですからね。私も本気でいかせていただく……！」

続いて、男は右手でつるりと顔をひとなでする。

「ツ……!？」

次の瞬間、マルカが思わず息を呑む。ミャオマオも、驚いたように目を丸くし

た。なんと、男の掌に吸い付くようにして顔の皮が剥がれ、その下から赤黒い肉が現れたのだ。わずかな魔法の光を発していたことから、どうやら変化の術を使っていたらしい。

……変身が解け、そこに現れたのはおよそ「顔」と呼べるものではない異相だった。皮膚はなく、表情を作るための顔筋が直接露出し、鼻の肉はそげ落ちたように失われている。目の位置にぼつかりと空いた眼窩がんかの奥には、憎悪に燃える瞳が二つ、赤く光っていた。

「あ、あなたは……？」

「ふふ、私は魂に苦痛と破滅を与える黒魔術を極め、とうに生身の人間など超越した存在……そんな私に、すでに「顔」などというものは不要だ……！」

変化の術が解けたと同時に、声色までもが少ししわがれたものに変わっている。「私の本当の名前は……ジユドだ。ジユド・ゲルトラ・アレイガン……ここがバストリアなら、『苦痛の魔術師ジユド』と名乗ったほうが早いかね」

「な、何だって!？」

ミャオマオが叫ぶ。その名前には、マルカも聞き覚えがあった。

「ジウド……まさかあの、バストリアの暗黒街を追放されたっていう……?」

誘拐した少年少女を使った人体実験、苦痛と憎悪に歪んだ魂を取り出すための猟奇的な殺人儀式……彼が、黒魔術研究とその資金捻出のために行なった非道な行為の数々は、ガイラントにまで知れ渡っている。無法が大手を振ってまかり通るバストリアですら、この男の所業は許しがたいものであったらしい。かの地を統べる黒の霸王の命令で、彼はそこを追われることとなったという話だ。

「しよせんほんこつ凡骨に天才の思考は理解できぬ……私に屈辱を与えた奴らは、絶対に許さん。いずれ私が黒魔術の頂点を極めた暁には、すべて始末してやるさ……!」

吐き捨てるように言ったあと、ジウドはマルカとミャオマオに、冷ややかな目線を投げかけてくる。

「さて、小娘と野良猫一匹、この私に、そのおもちゃみたいなスコップや小剣で立ち向かうつもりかね?」

その凍りつくような視線と声色にぞつとしながら、マルカは気丈に言い返した。「黒魔術の天才だかなんだか知らないけれど、あなたは最低よ。自分の欲望のためなら、他人を平然と捨て石にするってわけ？ あたしたちをこの遺跡の罨や守護者、魔物たちの囿にするなんて……！」

「だったらどうした……金に目がくらんだバカな小娘と魔猫の一人や二人、犠牲になったとしても大したことはあるまい……すべては我が野望のためだ」

「……頭にきたわ！ もう、絶対に許さないわよ！」

言うが早いのか、マルカはジユドにスコップで打ちかかる。正当な剣技の手ほどきこそ受けたことはないが、手近なものを使って急場をしのぐ術なら、並みの剣士には負けない自信があった。それは、元はイースラのトウリヨウたちが身につけていたという技だが、それをマルカは独自に研究し、自己流に鍛え上げている。ミヤオマオも同時に、小剣を構えてジユドに向け、一撃を繰り出した。

「おおつと……」

ジユドは余裕たつぷりに呟くと、ひらりと身をかわす。同時にその影が不気味

にうごめくと、そこから白い糸のような、無数の細長いものが飛び出した。それらはしゆるしゆると二人のほうに伸びると、まるで意志があるかのように、その身体に絡みついて動きを封じてしまう。

「こ、これは……!?」

「う、動けない!」

「ふふ、魂食い蛇の子供さ……魔力を持った者の影に潜む、可愛い奴らだよ。姿は蛇に似ているが、実質は別の闇の魔物だね。強烈な毒や鋭い牙こそ持っていないが、主に对する敵意を持った相手に絡みついて、魔力を吸い取りつつ動けなくしてしま……。特に君たちみたいに、すばしっこい獲物を身動き取れなくするには有用だ。さて……」

ジユドはにやりと笑いながら、新たな闇の呪文を編み始める。

「まずはその厄介な野良猫から始末してやる……我が『命運の搾り取り』の秘術でね。少し時間はかかるが、これなら例え魂石化の技があろうと、ひとたまりもないだろう!」

「ぐっ……」

「ミヤオマオ……！」

マルカは焦った視線をミヤオマオに向けるが、魂食い蛇たちに絡みつかれて、小指一本動けない。やがて不気味な詠唱とともに、ジユドの指先に、黒い霧のようなものが集まり始める。まもなくするとそれは命を持つかのように蠢き、一気にミヤオマオに向けてほとばしった。

「あつははは、これで終わりだ……！ 次は小娘、貴様を始末してやる！」

狂気じみた哄笑とともに、ジユドが叫ぶ。マルカが思わず目を閉じたその時。

「そこまでよ！」

凜とした声とともに、銀色の光がどこからともなく飛来する。それは同時に飛んできた小さな瓶を砕き、たちまち空中に中身の液体を飛散させた。周囲に一瞬、虹色の光が散らばったかと思うと、ジユドの手元から撃ち出されようとしていた黒い光は、たちまちかき消されてしまった。

「こ、これは神泉の聖水……？ 『神泉の加護』の術か!？」

苦々しさを含んだジユドの声が響く。それに答えるように、宝物庫の中に若い女性の声が響いた。

「……賞金首の黒魔術師・ジユド。あんたをとっ捕まえて賞金の五千万レット、このネアルピがまるつといたたくわよ！」

マルカたちがはつと視線を送る。そこには銀色の鎖を引き戻し、手元に帰還したチェーンソードを改めて構え直した、艶っぽい美女が立っていた。

「ちっ！ 貴様は……！」

「そこのお嬢さんの尾行に夢中になって、肝心のアんたが尾けられてたことに気づかなかつたようね……！ まだまだ聖水の瓶はあるわ。あんたの闇の魔術はもう効かないわよ、観念なさい！」

ネアルピと名乗った美女は、片手で先ほど投げつけたのと同じ、いくつかの小瓶を弄もてあてびながら言った。

「ぐっ……！」

形勢悪しと見て取って、ジユドは素早く新たな呪文を唱となえようとする。そこに

唐突に、いずこからか、今度は空気を切り裂くかのような重い一撃が飛んできた。それをかろうじて避けたものの、ジユドは大きく体勢を崩して、よろよろとたたらを踏んだ。

彼に重い斬撃を放った相手は、その背後に素早く回り込むと、ずいと大剣を上段に構えて言い放つ。

「『邪悪なる召喚』の術を逆用して逃げようだったって、ダメよ。私はラミカ、アルバネスの闘神官……私利私欲のために邪よこしまな呪術を使うあんたを、許すわけにはいかないわ！」

一瞬だけ背後に首を回してラミカの姿を確認したジユドは、まるで退路を探すかのように、素早く視線を前方に戻した。

そこには、につこりと余裕の微笑ほほえみを浮かべるネアルピと、彼女の聖水の効果ですでに魂食い蛇たちから解放され、怒りに燃えた瞳を投げかけてくるマルカとミヤオマオの姿がある。

ジユドの目に焦あせりの色が浮かび、その表情が憎々しげに歪んだ。

「さて、勝負はついたようね。あなたの呪文が完成するのと、この大剣がその身体を真つ二つにするのと、どっちが速いと思う？」

きつぱりとしたラミカの言葉に、ジユドはがっくりと膝を折った……。

※※※

「さて、次はこのでつかい宝珠だけれど、どうしたものかな？」

ジユドを聖水に浸した鉄の鎖で縛り上げ、念のためにと持参していたらしい魔術拘束着まで着せて部屋の片隅に「確保」したあと、ネアルピが茶目つ気たつぷりに言った。目の前の台座には、あの巨大なアンクアの結晶が光り輝いている。

「本来なら、すつごく活躍したあたしが、まるつといただいちゃいたいところだけれど……」

ネアルピはそう言いながら、ちらりと意味深げに、ラミカへと視線を送る。

「いいえ、ダメよ。今回の第一発見者は、このお嬢さんと人猫族の冒険者さんで

しよ。あんたといえど、この宝物の所有権は認められないわ」

ラミカは重々しく首を振り、はつきりと言いつつ切った。

「はいはい、わかったわよ。ま、あんたはそーいう奴よね。ギサに知らぬ者はない闘神官ラミカ様は、さ」

「これはどうも。分かっていただけで、嬉しいわ」

この二人の関係について、マルカが先ほど聞いたところによると、もとは偶然が生んだ腐れ縁だったらしい。ネアルピは、お尋ね者のジユドがガイラントにやってきたという噂を聞いて。ラミカは古王の墓所近辺に怪しい予兆があるという、霊界つなぎの巫女の予言によりこの地を調べに来て知り合ったそう。何でも出会のきつかけは、とある酒場での飲み比べ勝負だったという話だが……。

ラミカは続いて、マルカとミャオマオの方を振り向く。

「とはいえ、一つだけお願いしたいことがあるの。これはいわば交渉なんだけれど……」

「は、はい？」

マルカはその勇ましいアルバネスの闘神官に気圧されながら、小さく返事をした。ラミカの強い瞳が、まっすぐにマルカの目を覗き込んでくる。

鍛えあげられた肉体と武器の大剣にこそ威圧感があるが、よく見るとその顔立ちは精悍ながら整っている。彼女がなかなかの美人でもあることに、ようやくマルカは気づいた。

「あなたも分かったでしょう？ この宝珠は、大きな力を秘めたもの。これがジユドのような邪悪な者に渡ることがあつてはならないの……。できれば、私たちアルバネスの闘神官に、引き渡してもらえないかな？ 私たちと神官のみんなが、安全なところで、しかるべき処置を施した上で管理したいんだけど……？」

「おいおい、マジで……!? 闘神官様とはいえ、それはちよつとズルインじゃないの!？」

割って入ったネアルピの声に、きつぱりした調子でラミカが答える。

「私には、ガイラントに災いが広がるのを未然に防ぐ責任があるのよ。それに、無償でとは一言も言っていないわ」

「で、でもさあ……」

なおも不満げな声をあげるネアルピをラミカがひと睨みすると、彼女は肩をすくめて大人しくなった。彼女なりに事情を察しているのだろう、もともと、本気で文句を言いたかったわけでもなさそうである。

「どうかな？　十分とは言えないまでも、私たちにはあなたに報酬を払う準備があるのだけれど。それに加えて、代わりと言ってはなんだけれど、この宝物庫にある宝は、全部あなたに譲るわ」

そう言つてから、ラミカはじつとマルカの顔を見つめる。

「は、はあ……」

宝珠はともかく、この部屋に残されている財宝は、少なく見積もつてもかなりの価値がある。持ち帰つてしかるべき筋に売り渡せば、ジユドが約束していた報酬がまるごと失われたことに加え、ここまでかかった経費を差っ引いても、そこその額が手元に残るだろう。さらに、別途の報酬までもらえらるれば……。

「……ど、どうしようか、ミャオマオ？」

マルカが困ったように隣のミャオマオを見ると、彼は小さな肩をすくめて言った。

「ま、いいんじゃないか。マルカ、君も内心で、ちよつとは思っていただろう？
こんな巨大すぎる力は、一人占めするにはあまり重い。それはきつと、災いを
呼ぶ……そもそもあの宝珠、大きすぎて私のポケットや君の背負袋に収まらない
しなあ」

「よし、じゃあ決まりね！ ありがとう、あなたたちの協力で感謝するわ！」
にっこり笑ったラミカが、握手を求めてくる。マルカも少し笑顔になって、そ
の手を握った。

「ところであなた、なかなか腕が立つみたいね。どう、私のところで修行しない？
神官戦士としても、いい筋をしていると思うけど」

「い、いえ、お断りします！」

「あら、残念ね……」

「あつははは！ ラミカ、どうやら振られちゃったみたいね！ そうだ、じゃあ

私の助手はどう？　あなた、まだまだちよつと野暮つたいけれど、磨けば絶対光るわよ。報酬もはずんじやう！　なんならいいオトコだって、バンバン紹介しちやうわよ!?」

「いえ、そちらも結構です……」

マルカが顔を赤くしながら断ると、ネアルピは残念そうに、その肉感的な唇を尖らせた。

「えー……その可愛い猫ちゃんも一緒に、悪党たちを片っ端からふん捕まえつつ世界を旅して回るの、絶対に楽しいと思うんだけどなあ。ねえ、君もそう思うでしょ？」

言うが早い、ネアルピはミヤオマオをさつと抱き上げ、その豊かな胸を押し付けるようにして頬ずりした。

「こ、これは……いやあ、困ったな、ハハ、悪くない気分だねえ……!」

ニヤついたミヤオマオに冷たい視線を送るマルカ。そんなやりとりを苦笑しながら見ていたラミカが、ふと真剣な顔に戻って言う。

「あら……それは……？」

彼女の視線は、マルカが腰帯に下げている、宝石のブローチに止まっていた。

「あ、これですか？ 昔、父にもらったものなんです。私の宝物で……」

マルカが少し寂しそうにそう答えると、ラミカはふと、考え込むような表情を見せる。

「ふうん……ところで、あなたのお父上の名前は何て？」

「え？ ああ、テルマです。……ナンガ村出身のトレジャーハンターで、テルマという名前でした。でも父は『霊界つなぎの大霊廟』の調査に行くといい残して家を出て……そのまま、まだ帰ってきていないんです……」

うつむきがちにそう語ったマルカに向けて、不意にラミカが大声をあげた。

「テルマ？ もしかして、あなたの父上は、あの高名な冒険家のテルマ殿なの!?」

マルカは思わず、彼女に尋ね返す。

「ち、父を知っているのですか!？」

「ええ、テルマ殿といえは、私の従妹の恩人なもの！ 彼が、従妹を窮地から救ってくれたのよ！」

「え、そ、それはどういう……？」

思いがけない言葉に、マルカが思わず身を乗り出す。

「そ、それは本当なのか!？」

「あん……」

不意に、ネアルピの腕の中から飛び出したミヤオマオまでもが、強引に話に割り込んできた。

「テルマは、私の古い友人でもあるのだ。いったい、どんな経緯で、あなたたちと彼が関わったんだ!？」

「そうね、順序立てて話しましょう。まず最初は……」

※※※

それから二十分ばかりが過ぎた頃。マルカとミャオマオは、その顔に興奮の色を浮かべて、ラミカの話に聞き入っていた。彼女によれば、マルカの父・テルマは、かつて、ラティスにあるアルバネスたちの村を訪れたことがあるという。最初は警戒していたアルバネスたちも、陽気で紳士的な彼の様子に、次第に打ち解けていったらしい。その後、彼がたまたま持っていた魔法薬で、族長の娘の病気を治療したことがきっかけで、彼は正式に客人としてその村に迎え入れられた。そして、気のすむまでそこに滞在することと、付近の遺跡の調査をも許されたのだという。その後、「霊界つなぎの大霊廟」を開く鍵となるという古い精霊門を調査中に、行方不明になったというのが、ラミカが語ってくれた話のあらましかつた。

何でもその門の秘めた力が偶然作動してしまい、たまたま同行中だった案内人の少女の身をかばって、テルマはその光の中に飲み込まれたらしい。そしてその少女が、ラミカの従妹だったというのだ。

「その精霊門というのは、いったい……?」

マルカが勢いこんで尋ねると、ラミカの代わりに、同じく話を聞いていたネアルピが答えた。

「ああ、ガイラントに古くから伝わる遺跡の一つね。ドルイドたちは、それは精霊たちが住む、魂の世界に通じているって考えてるみたい」

「そうね。また、その中の空間の一部はアトランティカとは異なる別の世界に通じているという噂もあるわ」

ラミカがそう付け加えた時、マルカの瞳がさつと輝いた。

「じゃ、じゃあもしかして、父さんが、父がどこかの世界にたどり着いて、生きている可能性も……!?!」

「それが……精霊門の中に落ちた人がどうなってしまうのかは、誰も知らないのよ……」

ラミカが歯切れ悪く答える。

「それでも……それでも、まだ可能性はあるんですね？ 父がどこかの世界で生き延びているっていう……?」

「それはそうね。精霊門自体は、決して命を奪うための邪悪な存在ではないからでも……」

同時にラミカは気の毒そうに、こうも付け加えた。けれど、過去にその中に落ち込んで、戻ってきた人はいないのだ、と。

「……」

マルカは無言で、ぎゅっと手のひらを握り締めた。

「マルカ……？」

ミャオマオが、心配そうに彼女の顔を見上げてくる。彼を落ち着かせるかのようになんと微笑みながら、マルカは静かに、腰帯に下げたブローチを手取る。そこにはめ込まれた宝石が、宝物庫の中にゆらめく光を受けて、きらりと照り輝いた。それを眺めているうち、マルカの胸の中がきゅっと熱くなる。やがてその熱は、次第に身体を包んでいき……小さな希望と決意の火が、少女の心の芯にそっと点った。

（待っていて、お父さん……いつかどこかで……必ず私、会いに行くから！）

マルカは心の中でそう呟き、まるで未来を見据えるかのように、ほの暗い宝物庫の中で視線を上げた。その深く青い瞳は、この世界ではないどこか、いつかの時代で、今もあてのない旅を続けているかもしれない、一人の男の姿を映していた……。

【了】